

1. 現状と課題

【鹿島区の現状】

- ・鹿島区市街地では人口減少や少子高齢化が進行し、店舗・事業所も減少しており、高校卒業後は進学や就職などで地域外へ出て行ってしまい、鹿島には戻ってこないことが多いのが現状です。鹿島区の現在の人口構成からも、若い世代の地域外への流出傾向を読み取ることができます。
- ・本市が2024年に行った市民意識調査では、前回調査(2022年)に比べ「今後も南相馬市で暮らしたい」という意向について鹿島区においては8.7ポイントの減となっており、地域への愛着低下がうかがえます。
- ・これらの要因として、まちなかにおいて地域の住民等が気軽に集まったり、日常的に出会う場所が減少していることやイベント等の減少、住民同士の交流の減少が考えられます。

【鹿島区の課題】

地域への愛着を醸成する機会をつくる必要がある

地域の活力を維持していくためには、定住を促進することが必要です。若い世代の定住には、まず、地域に対する愛着醸成が必要であり、地域住民に、鹿島の「まち」「ひと」「自然」の魅力を知ってもらえるような多様な機会をつくり、市外に出て、地域に対する魅力を感じ続けてもらえるよう働きかけることが重要です。また、鹿島区を持続可能な地域とするためには、移住者の誘導も必要です。

【鹿島駅舎の現状】

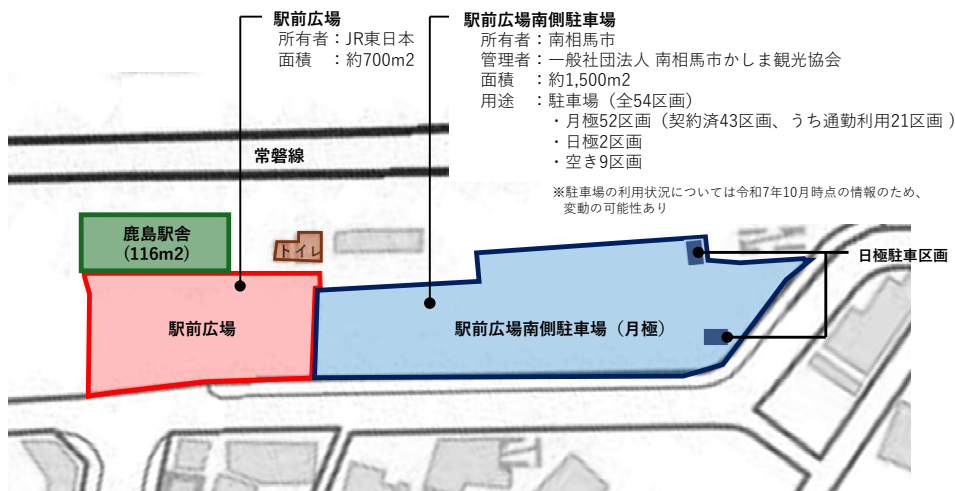
- ・鹿島駅舎は築127年と福島県内の常磐線の駅舎で最も古く、歴史的な価値を有しています。
- ・鹿島区内唯一の鉄道駅であり、高校がない鹿島区においては、通学のために大部分の地域住民が毎日利用している思い入れの強い場所です。これらのことから、JR東日本による駅舎の建て替えに対して現駅舎の存続を求める声が上がりました。
- ・鹿島区には高校が無いことから、地元の高校生の大半が通学のため日常的に利用する場です。
- ・高校生からは、放課後は学校のある地域で過ごすことが多いとの声が聞かれました。現在は駅員のいない無人駅であることから、不安を覚えるとの声もあります。

【鹿島駅舎の課題】

「通り過ぎる駅舎」から「集える駅舎」への転換

現在の駅舎は鉄道利用者が利用するための施設で、十分な広さがないことから、駅舎利用者が足を止めて集うような滞留の場として機能していません。このため、現駅舎の保存活用にあたっては、現在利用されていないスペースの利活用方法を検討する必要があります。利活用の検討にあたっては、より多くの地域住民が駅舎を利用したくなる仕掛けが必要です。また、駅舎のコアユーザーである高校生の居場所としての検討が必要です。

■鹿島駅及び駅周辺の現状



2. 事業目的

鹿島で育まれてきた多様な魅力を通じた交流により、郷土への愛着を醸成する場づくり

鹿島区の課題である「地域への愛着を醸成する機会」をつくるうえで、地域住民に馴染みのある鹿島駅舎を活用することは有効だと考えています。一方で、現在の鹿島駅舎はそういった場とするうえで課題を抱えていることから、本事業では鹿島区及び鹿島駅舎の課題にアプローチした取り組みを行います。

まず、若い世代を中心とした地域住民が地元への愛着を持ちにくい背景には、イベントや交流機会の減少により、地域とのつながりを得る機会が失われていることがあげられます。住民の定着を促進するためには、地域に対する愛着の醸成が不可欠です。そこで、歴史的な価値を有し、多くの住民が深い思い入れを持つ「鹿島駅舎」を、郷土への愛着を育む場として活用します。本事業では、この駅舎において鹿島の「まち」「ひと」「自然」の魅力を再認識できる多様な機会を創出し、それらを通じた交流によって地域への愛着を醸成する場づくりを行います。

鹿島駅舎は地元の高校生の多くが通学のために日常的に利用する場です。地域住民間の交流の場において若い世代の主体的な利用を促すことは大きな課題となりますが、本事業では「高校生が毎日必ず訪れる」という利点を活かします。高校生が日常的に利用する場と地域の人々が活動する場を重ね合わせることで、特別なイベントとしてではなく自然な形で、多様な世代の地域住民間の接点を創出し、交流を促進します。

鹿島らしさが随所に息づく場となる駅舎は、地域外からの来訪意欲を喚起します。移住検討者を含む地域外からの来訪者（以下、来訪者）が駅舎で展開される地域の活動やそこに集う地域住民との交流を通じて、鹿島をより深く知り、繰り返し訪れ、移住意欲を高めることにつながります。そして、地域住民が郷土への愛着を醸成するうえで、来訪者との交流は重要な役割を担います。地域住民にとって、客観的な視点をもつ来訪者との対話は見慣れた日常を鹿島の魅力として再認識するきっかけとなることから、このような交流を経て鹿島の魅力をより深く知ることにより郷土への愛着を醸成し、定住意欲の向上へとつなげます。

3. 事業コンセプト及び施設計画

【事業コンセプト①】鹿島の魅力を見つめなおす場所とします

鹿島の魅力として、歴史や文化を表現する相馬野馬追などの伝統行事や祭礼行事、豊かな自然である阿武隈山系の山並みや河川、海岸の風景、想いや温かさを感じる生業に関わる手しごとや地域住民による多様な活動などがあげられます。ただ、地元で暮らしているとそれらは日常の一部となり、改めてその価値に気づくことは少ないものであり、知るきっかけがないと来訪者が関心を寄せることもありません。地域住民が駅舎を利用することで地元のことを再認識するとともに、来訪者も鹿島の魅力を体感する場とします。



■外観

【特徴①】大きな開口を設け、外から施設内の様子を見えやすくすることで、中の活動の様子を知り関心を抱ききかっけにつなげます。

【特徴②】地域住民に馴染みがあり、歴史的な価値を持つ鹿島駅の雰囲気を受け継ぎます。相馬野馬追の紋様をデザインとして取り入れるなど、鹿島の魅力をかたちづくる歴史や文化を感じられる外観とします。



■内観

【特徴①】鹿島区で行われている活動に由縁のある素材を内装材として用い、鹿島に関わる人々の暮らし、活動が感じられるよう演出します。

【特徴②】相馬支援学校をはじめとした、鹿島の子どもたちが持つ豊かな感性から生まれた作品の展示を積極的に行います。

【特徴③】大きな開口を通して、鹿島の魅力を形づくる山並みや夕陽の風景を再認識できる機会を創出します。

■施設内での取組

鹿島区の魅力である「地域住民による多様な活動」を鹿島駅舎で行い、駅舎を訪れた人の目に触れることをきっかけに活動の広がりに繋げていきます。駅舎内では地域住民の活動の発表やイベントのみならず、発表に至るまでの過程である日常的な作業や練習なども施設内で行うことにより、交流のきっかけとします。鹿島区を中心に活動している個人・団体へのヒアリング等を実施し、絵てがみ教室、高校生向けキャリアワークショップ、ミニライブの開催等の活動を想定しています。

【事業コンセプト②】鹿島の居場所とします

現在の駅舎の主な利用者層である高校生へのヒアリングを行ったところ、鹿島区内で過ごせる場が極めて限られており、自宅以外に自分の居場所を見出しにくい現状が浮かび上がりました。このため、高校のある小高区や原町区、市外で友人達と過ごす時間が長くなるのが現状です。鹿島区で過ごす時間が増えてこそ鹿島での思い出が増え、地元への愛着を育むことにつながると考え、鹿島における居場所づくりを行います。また、来訪者も駅舎を鹿島における居場所とし、そこで過ごすことにより地域の日常を知ることができる場とします。

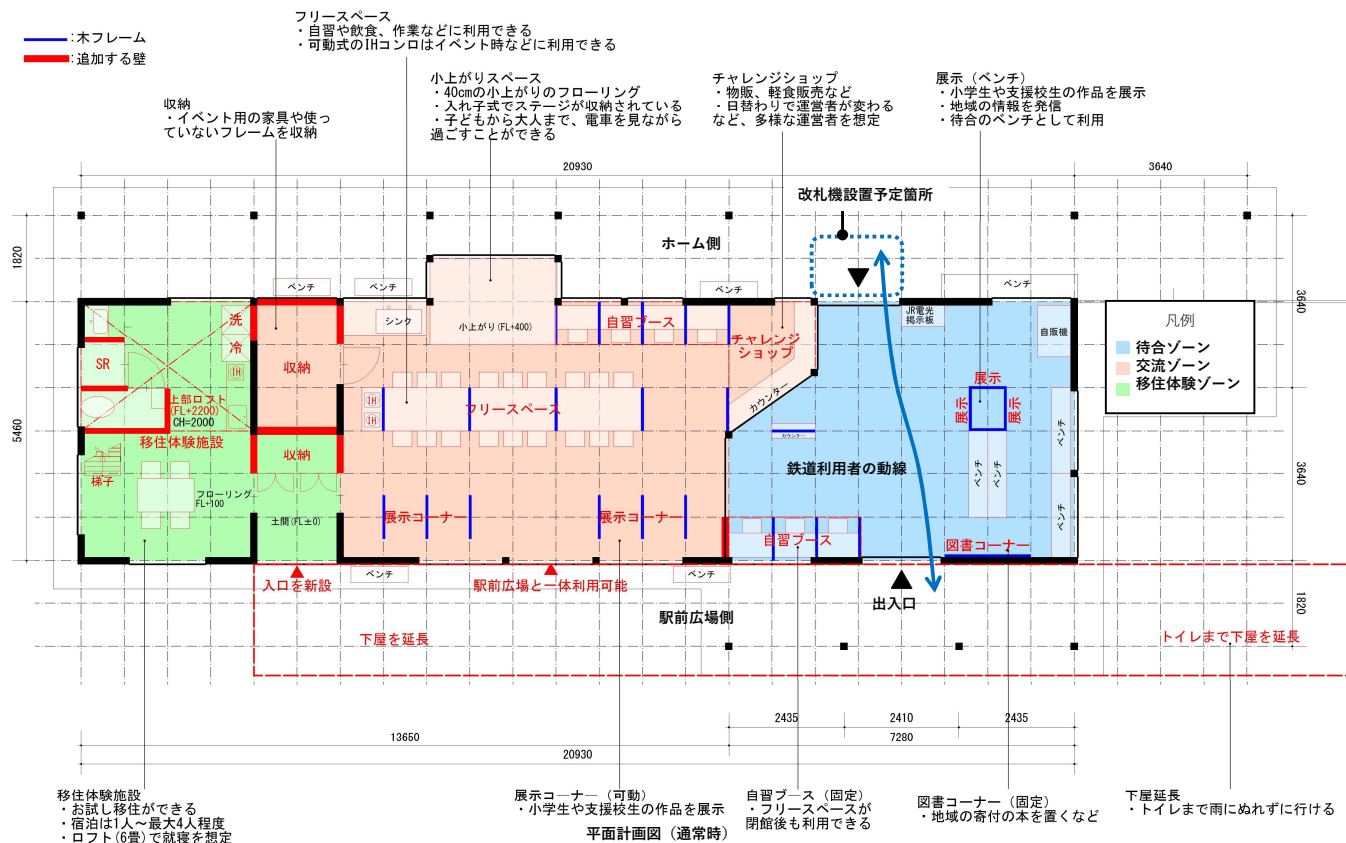
■市民ワークショップでの意見

市民ワークショップ（全3回）及び高校生ワークショップ（全1回）にて駅舎の利用方法について意見出しを行い、意見を分析することで以下の考え方が必要であることが判明しました。これらの内容を平面計画に反映しています。

・高校生や地域住民が居場所として利用できることが重要であることが伺い知れました。居場所としての利用に対しては、談話、休憩、自習、読書等様々なニーズがあったため、可変式の木フレームを使うことで各利用者にとって居心地の良い空間を作れるようになります。

・「外から施設内の様子が見えること」といった施設のハード面での提案や、「イベント等の実施」といったソフト面での提案もワークショップにて多く聞かれました。また、平日は居場所利用が多く、休日はイベント実施がしやすいといった意見から、平日と休日で施設内のレイアウトを変える等、多様な活動に対応した計画とします。

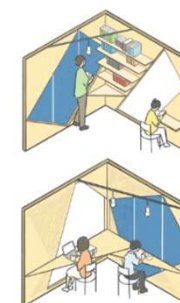
・鉄道利用者の動線を考慮すると、現在、鉄道利用者の待合として利用されているスペースは、改修後も同様の役割が期待され、地域住民の日常的に利用したい機能は交流ゾーン付近に配置する声が集まりました。このため、駅前広場から交流ゾーンに直接来場できることや駅前広場との一体利用を実現するため、出入口を新設します。



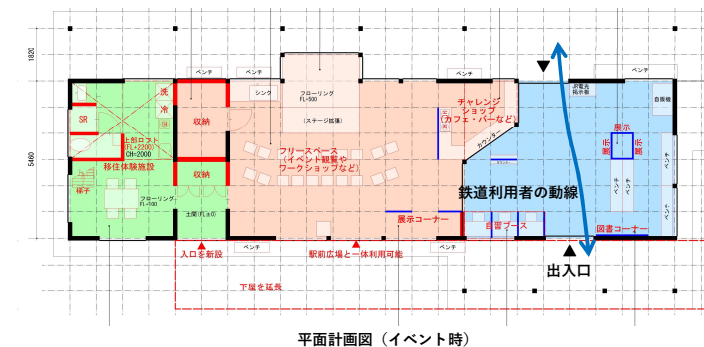
■木フレームの活用

多様な利用者のニーズにあわせた自由な使い方を実現するための手法として、木フレームを活用します。木フレームは地域産材を活用し、住民が染めた布などの素材を利用して彩ります。

木フレームは可変性・可動式であり、温かみのある雰囲気や空間を緩やかに仕切り、利用者に居心地の良い居場所をつくりだします。木フレームを組み合わせることで、様々な居場所をつくるのが可能です。



木フレーム活用イメージ



移住体験ゾーン（約24㎡）

- ・移住希望者が宿泊可能なゾーンとします。
- ・ホーム側に窓を設けるなど、駅舎という特別な環境を活かし楽しみながら滞在ができる空間づくりを行います。
- ・交流ゾーンの活用を促進し、滞在中は容易に地域住民と交流できるようにします。

交流ゾーン（約56㎡）

- ・地域住民の日常的な居場所として、またイベントやサークル活動等の実施など、多様な用途での利活用を可能とします。
- ・鉄道利用者の多い時間帯は、待合ゾーンと連携して、待合としての利用も可能にします。
- ・イベント時には駅前広場とつながり、一体的に利用できるようにします。

待合ゾーン（約36㎡）

- ・鉄道利用者の待合のためのゾーンとして、待合機能を充実させます。
- ・24時間開放（施錠しない）エリアとします。
- ・駅舎利用者に向けて情報発信を行います。
- ・展示スペースを充実させ、鹿島の歴史、鹿島区内の取り組みや情報発信を行う場として活用します。

【事業コンセプト③】交流が広がる場所とします

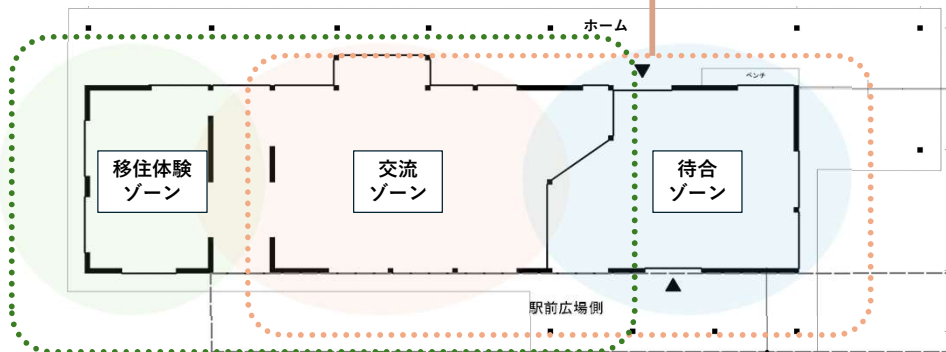
現在鹿島区内では、かしま交流センターや鹿島生涯学習センターがサークル活動や教室等の活動を行う場として活用されています。これらの場所は閉じられた空間のため、他者の目に触れる機会も無く、活動の広がりが期待出来ない状況にあります。今回、駅舎を地域住民が日常的に利用できる場とすることにより、この場で行われる活動に触れ、参加しやすい環境を整えます。また、人の往来が多いという駅舎ならではの長を活かし、活動を通じた交流の活性化も期待されます。

駅舎内で行われる「事業コンセプト① 鹿島の魅力を見つめなおす」取組は、地域住民と来訪者のコミュニケーションツールとしての役割を果たし、両者の間に自然な交流をもたらします。こうした交流を通じ、地域外からの客観的な視点で鹿島の魅力についての意見を聞くことは、地域住民にとって、自分たちが暮らす地域の価値を再認識し、愛着を持つきっかけとなります。また来訪者にとっては、鹿島のことをより深く知り、関わるきっかけとなります。

■駅舎内の各ゾーンを隣り合わせるねらい

交流ゾーン×待合ゾーン

「高校生を中心とした鉄道利用者が滞留する場」と「市民活動の場」を隣り合わせることで、多世代が日常的に接点を持ち、交流を持つ機会が生まれます。



交流ゾーン×移住体験ゾーン

駅舎のコンセプトである「鹿島の魅力」がコミュニケーションツールとなり、移住検討者は鹿島への関心を高め、地域住民は新たな視点での意見を聞くことで地元の魅力を再認識することにつながります。

■地域の声

地域で活動する団体や個人を対象に、各々が取り組んでいる活動を行う場所としての活用可能性についてヒアリングを実施しました。代表的な内容は以下のとおりです。

関係者以外の目が届かない空間で活動しており、活動の広がりが感じられない。開かれた場で活動することで、日常的な取組自体が情報発信となり、さらなる活動の活性化が期待できる。

活動の発表だけでなく、日常的な取組（作業など）をこの場で行うことで、地域とのつながりを得ることが期待できる。

開かれた場である駅舎を日常的な取組を行う場として活用し、
地域住民や来訪者の交流を広げることにつながります。

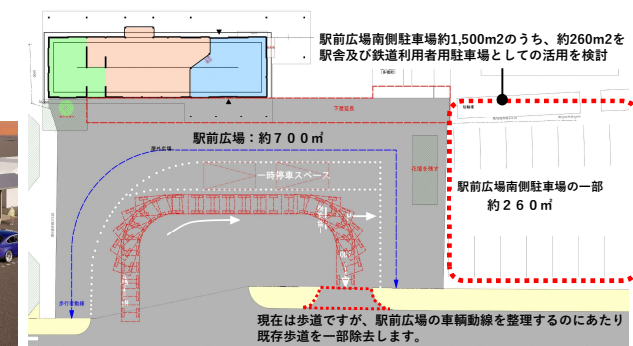
4. 駅舎周辺の考え方

駅舎の改修に合わせて、駅前広場や駐車場等も一体的に整備します。駅前広場は、歩行者・自動車の動線を整理し、送迎等の際に安全で使いやすい駅前広場とします。鉄道や施設利用者の駐車場など、駅舎周辺の敷地も含めて必要な機能を確保します。既存トイレは駅舎から庇を連続させるなど、駅舎利用者が利用しやすい動線を確保します。

現在、駅前広場南側の既存駐車場の一部区画を駅舎利用者及び鉄道利用者用の駐車場として活用することを検討しており、管理者であるかしま観光協会と協議を行っています。



駅前広場イメージ



駅前広場配置計画図

5. 運営方法

改修後の駅舎を地域に身近な使いやすい施設とし、地域団体や民間事業者のノウハウを生かすことで、運営プログラムを充実させ、収益性を含めて柔軟な運営を目指します。地域の多様なプレイヤーの参画を募り、地域に寄り添った運営を行っていくため、地域おこし協力隊制度の活用や指定管理者制度など、意欲的な管理・運営主体が望まれます。本計画では、以下の2つの方向性を示します。令和8年度以降、関係者等との協議等を行いながら、事業手法を決定します。

運営手法案1 市直営（地域おこし協力隊制度も活用）

施設の管理・運営の担い手として地域おこし協力隊を募集します。地域おこし協力隊を中心として施設を運営しながら、指定管理者としての受け皿団体の育成を進め、3年後の移行を目指していきます。

運営手法案2 指定管理者制度の活用

地域団体等が主体となり、指定管理者として管理・運営を行います。今後、鹿島商工会等の地元関係者との協議を行いながら、地域の受け皿の可能性を検討します。なお、指定管理者制度を活用する場合も、担い手と十分な協議等を行い、施設の目的や運営方針を共有し、管理・運営に反映させます。

6. 建設費・維持管理費（想定）

①建設費

項目	金額（千円）	備考
調査・設計監理費	29,000	
工事費	146,000	周辺部外構込み
備品購入費	5,500	
合 計	180,500	

※工事費は既存躯体調査の結果や今後の物価上昇の影響により変動の可能性あり。
※財源として、第二世代交付金（内閣府）補助率1/2以内を想定。

②維持管理費

項目	金額（千円）
光熱水費（上下水道料金、電気料金など）	1,450
役務費（清掃作業費、インターネット使用料など）	340
施設管理費（消防用設備点検費、警備保障など）	220
移住体験ゾーン管理費（光熱水費、クリーニング費など）	594
人件費（地域おこし協力隊）	5,618
合 計	8,222

7. 事業スケジュール

	R 7 年度（2025）	R 8 年度（2026）	R 9 年度（2027）	R 10 年度（2028）
主なイベント			● 駅舎譲渡に係る協定締結 ● 駅舎譲渡契約締結	オープン
南相馬市	整備計画策定	基本・実施設計	改修工事	
JR東日本			支障移転	

※表中の支障移転は、今般の駅舎譲渡と改修にあたり必要とされるSuica改札機をはじめとしたJR東日本が所有する資産の移転作業を行うもの。